

イベント

RHIT では、いくつかの伝統行事がある。そのうちの 하나가 Bonfire である。Bonfire とはいわゆるキャンプファイアのことであり、RHIT の Bonfire はかなり規模が大きい。行程はキャンプファイヤと同様で、木材を組み立ててそこに引火する。木材の組み立てはすべて1年生によって行われるのが伝統となっている。噂によると、ただ組み立てるだけでなく設計から配置まで計算して行われるらしい。この Bonfire の素晴らしいところは、このイベントのためにこれまでの卒業生がこの Bonfire を見るために学校を訪れることである。去年の卒業生から40年以上前の卒業生まで訪れるらしい。その人たちが今の学生と交流している姿が印象的であった。

授業

英語の授業では、数学の用語に関するプレゼンテーションを行った。基礎的なレベルの数学だが、英語で説明する際にどのように表現すればいいのかわからなくなる時が多々あるため、このプレゼンテーションはかなり役に立った。リーディングのクラスでは日本とアメリカの会話の違いというトピックを題材に、文章の構造について学んだ。このトピックでは、アメリカ人は会話が「テニス」や「バレー」のように一時停止がないのに対して、日本人は相手が話し終わることを確認したうえで自分の話をするところから「ボウリング」として例えられていた。コミュニケーションの上では、言語の習得とは別に文化による壁も存在することを述べていた。Bio Signal Processing のクラスでは、実験の時間に各グループごとで回路を設計し、LabVIEW と MATLAB というソフトウェアを使ってコードを書いたうえで、グループの中から一人を被験者として、実際にその人の腕から EKG 信号を読み取り、それらのデータを様々なフィルタに通してそれぞれの性能を確認した。回路の設計の段階ではわかることが多かったためグループの中で発言することができていた。しかし EKG の測定に使われるコードを書く際は、知らないことが多すぎたためグループの議論に入れていなかった。また、今月は中間テストが実施された。内容としては、数式をがりがり解くというより、コンセプトをしっかりと理解しているかを聞いていたためか予想よりも解くことができた。授業では数学による説明がほとんどを占めているため、理解するのに苦労している。

発見

RHIT の授業では、学生と先生の意見交流がかなり多い。私にとって、質問するということはそれまでの内容を理解していて、かつ的確な質問をすることだと思っていたため、そのようなアメリカの学生の姿を見て「なんでそんなに理解が早いんだ」と驚いていた。しかし、先生との授業の速さや専門用語もわかってきたこともあり、授業中の学生の質問も理解できるようになってきた。そこで気が付いたのが、学生の質問の内容である。学生は高校で習うような基礎的なことや、ついさっき先生が言ったことを質問することが多々ある。理解が完璧でなくても、質問がどれだけ基本的なことであってもすぐに質問する。この姿勢は見習いたいと思っているため、私も少しでもわからなかったら先生や友達に聞くようにしている。

アメリカの食事のカロリーが改めてすごいと感じた。例えば、日本でサンドイッチを喫茶店で注文すると物足りなさを感じるが、こっちはその2-3倍であるため満腹による苦しさを感じる。しかし、知らないうちにこれらのサイズに慣れていたので少し太った。ほぼ毎日走っているが、食事を制限しないと太ることに今気づいた。

さいごに

RHITへ来てから2か月が経った。多くの課題や各授業での最終プロジェクトも取り掛からなくてはいけなくなってきたため毎日大変だが、ただそれらをこなすだけでは無く、為になるよう理解することに努めたい。